天上の炎

エミイル・ヱルハアラン作

高村光太郎譯

エミイル・ヴェルハアラン作
高村光太郎譯

天・上・の・炎

——詩集——

新しき村出版部版

天上の炎

未來を愛する人人へ

「天上の炎」は Emile Verhaeren の最後に出版せられた詩集 Les Flammes hautes の全譯である。此はヱルハアランがルウアンで死んでから直ぐ出版せられた詩集で、著作順からいふと「波うつ麥」と「戰爭の赤い翼」との中間に位するものである。原稿は大戰前に書かれたのであるが、一九一四年八月校正が白耳義に送られて以來、一九一六年十一月ヱルハアランの死ぬまでそのままになつてゐたのである。此譯は一九一七年の第五版を本文とした。自由律とはいつても、原詩は皆韻がふんであり、中にはアレキサンドランで書かれたのさへあるが、譯

詩は日本語の性質上皆自由詩にした。エルハアラン及其詩について
は別に書くつもりで居る。

大正十三年九月

高村光太郎

目次

序詩

未來……一三
新らしい都……二一
昔の信仰……三七
私の眼よ……四七
誇……五五
機械……六三
熱烈な生活……七三
港の突堤で……八三
今日の人に……八九

健康……九五
死者……一〇一
問題……一〇七
機會……一一三
トンネル……一二一
波戸場で……一三七
私の都……一四九
わが友風景……一五九
木蔦……一七五
東西南北……一八三
森……一九一
花の方へ……二〇七
並木の第一樹……二一三
散歩……二二一
或る夕暮の路ゆく人に……二三一

題跋詩

私の集……二四三

序

詩

未來

一

倒れては又起きあがる私の心は
力ある一躍を以て突きすすむ、
目もあやな未來の方へ、
私の夢のつくり出したいと思ふやうな、

私は思ひきるべきものを知つてゐる、
確かすぎる幸福、強すぎる明るさ。

だが疑惑、過激、危険、それが何だ、
私は未來の熱望を持つ。

要するに人がもはや
聖者達のみ心のまま、神神のみ名の下に、
是非もない天命がきまると信じなくなつて以來、
世紀は人人の手にある。

火と光明とを以て
明日を照らす者とは
戰の苦惱を經て
尙その人間的心情を失はない者である。

彼等の叫と、彼等の望と、彼等の行とは
細やかに、一切を下描する、
まだ濃密な闇黑に充ち滿ちた
あの宏大な悲壯な「知られぬ者」を。

しかも彼等の祖先が神神に投げた祈と
同じ祈が其をめがけて湧き立つほど
その力ある神秘のまはりに
かくも多くの懇求を集めるあの「知られぬ者」を。

二

否、それはもはや砂の上にはない、

重苦しいきまりきつた安息に墮した
居て氣持のよい樂園のやうなものにはない。
未來が私の夢にとつてあるのは。

むしろ不敵な都である、
其處では一切の魂が糧とする、
その不斷の戰に於いて
烈しい高い慾望を。

そこでは天才がありあまつて
うつかりしてゐる宇宙から
その甚深の秘密と
その盲目な最上權とを盜みとる。

そこでは一切の古文書が鑄なほされる、
一層精確な研究の火で。
そこでは一切が力であり敏活である、
今にも落ちかかる危險をめぐつて。

そこでは思想家が聯盟し又誘導する、
おのが飛躍の中に他の人人を。
彼が一段から一段と
法則をさして、人間の理解を高める時。

かくて人間はつひに
おのれ自身の又大地のあるじとなり、

その權威ある額は
あの昔の命運の額を被ひかくすのである。

新らしい都

新らしい都

不敵な起重機は
大きな石を、ひとつひとつ、
天上へまでも引き上げるやう。
その鋼鐵の綱は月の光にかがやく。

更に遠く壯大なほかの起重機が
同じ樣に工事から工事へと君臨し、
猛火の重なるかけには
雲へまでもひびく千百の槌の音。

町の一斷面が其處に
塵と壁土との中に倒され、
雨にぬれて、地に横はる。
見通しに堀りかへされた地上には
ゆらゆらする古壁があやふく立ち、
煙と煤との一條の路が其に曲折してついてゐる。

今はもう死んでしまつた人人があの爐邊を愛したのだ、
その跡が廢墟の横腹にまだついてゐる。
彼等はまつかな火の其處に燃えるのを見、
手や額や胸を暖めたのだ。
彼等は歩いたり、坐つたり、

光さす炎のわきで金勘定したりして其の生涯を送り、
やがて或る夕、あの火のやうに消えてしまつた、
古くさい思想しかその胸には持たずに。
彼等は地面の下へ、何處かしら、遠くへ往つてしまつたのだ。
あはれな名はくづれた墓石の上にうすれゆき、
彼等の姿が、古い額ぶちに入れられてつるされた
その壁にはただ釘が殘つて居るばかり。
毎朝彼等の足の通つた寺院は
千百の殘骸の累累たるあそこに立つてゐたのだ。
彼等は其處で亡靈のやうに壁に沿つてすべり歩き
彼等の守本尊がその一切の運命を押へてゐた。
急調な時の鐘は其處で時間を鞭うち
大鐘はその長大音をとどろかした。

今は
もう何も聞えない。
曉から夕暮まで、鎖のきしる音と
爲事のかけ聲と汽笛のひびきとの外は。

かくて一切の過去は過ぎ去つた、
碎かれ、ひねられ、追ひはらはれ、
その四辻もその古い小路も皆いつしよに。
さうして既に地平に登り來つて輝き、
いや高まるばかりなのは、高塔と家家との誇である、
その新らしい群集の騷音のうなりである。

おう未來をつくる爲に集注された爲事よ、

整頓された力の不思議な雷鳴よ、
幽囚の生活をそこに閉ぢこめてゐたものもの等の
思出をいかにおん身はたたき壞した事ぞ。
私の思はおん身等にある、石よ、大理石よ、花崗岩よ、
おん身等は黄金とその暴威とに向ふ千の努力を、
だしぬけな和解あるにせよ、唐突な爭鬪あるにせよ、
未來が其處に蓄電せしめる石壁(いしかべ)となるのである。

二

朝から、
宏大な企業の都では、
千百の新聞がたちまち、

恐怖や憂愁や、緊急事項や驚愕を喧傳する。

世界は其處で釘に留められた線を傳はり、
傳音喇叭にひびく。
地面の中まで、暗い舗道の下を、
熱が走り、且つふるふ。

無數の白紙が飛ぶ毎に
人は百萬の翼を見るかと思ふ、
猛烈な人人の心の中に
或は調和或は葛藤を運ぶ翼を。

都の家は皆をののいて音を立て、

其處の頭腦は皆夢を見る、
いつの日か、その努力の下に、不可能の
陰と夜とのかたまりが持ち上げられるかと。

光といふ光はきらりと光る黄金の
たちまち照らしたちまち壓倒する光に似、
そこのすべての興味は更に弱い興味をうかがふ。
餌食として其を屠るため。

絶えず自己を超える事と他を凌ぐ事とが、
畢竟生活のならはしとなる。
又飽く事無き魂の飛躍の
據りどころとなる健康な體をつくる事が。

おう此の常にあらぶる不斷の奮激、
激怒し、爆發し、狂奔し、
しかも好意ある言葉と
柔和な談論との下にも亦隱れてゐる此の奮激。

悪か德か、此を何と思はうとも、
又ざんな名で人が此を呼ばうともよい、
此のみが人人の希望と信仰と
近代の誇とを構成する。

新らしい必要にせまられた
これこそ彼等の新らしい、獰猛な生存である。

これこそ彼等のむざんな力であり、これこそ彼等の心である、
彼等の頭腦の熱狂によつてつくられた。

三

かなた、遙かに、廣大な地を照りかがやかして、
倫敦、伯林、紐育、巴里が君臨する。
ね、いかなる誇に武裝された精神なれば
彼等相反する者の中に斯くも互に潛入し互に研磨する事ぞ。

努力が、昔の數字が、今日そこで緊締される。
一切が其處に集中し又同時に分散する。
胸を轟かして、われらに到達する貪婪な未來は

もはや人間の集團にしか身を任せようと爲ない。
秩序がそこに君臨する。正しくも、彼はその鞘の中に
分割された爲事の鋩(ほさき)と鐺(こじり)とを納めこむ。
一動き毎に、更に高い動きが延長される。
初は導き、やがて刺戟し又誘惑するのである。

されば常に卓から卓へと身を寄せつつ
一切がつひに一個の力に総括される。
多くの機械的な飛躍をその目ざす所に導くには、
ただ一つの、しかし聰明な頭腦があつて足りる。
彼である、彼ぎりである、判斷し且つ突如として決斷するのは。

他の者が何も見ないところに、彼だけが認める。
冷たい計算も持つが、燃える夢を持つ。
さうして危險の時期が彼には燦爛として輝いて見える。

時時そのノオトの展開する頁を離れ、
額を硝子に當てて、彼がたのしみ見るのは、
かなた、夕暮の中に立ち、
相競ふ商號を天上に聳かす他の家家である。

上から下までその百の窓は光り輝き
その光を彼の家に注ぎ彼に投げつけ、
窓ガラスの後ろに、彼は又見るのである、
彼を敵視して恐らく彼を打ち倒すかも知れない人物の歩くのを。

又更に遠く、港まで、街から街へ、
同じ爭がその紛糾を結び又は解き、
痛苦が其處では已み難い望を挫き、
又望がそこでは消滅した苦悶の後をうける。

一切が其處では不安、焦燥、吉か凶。
おう、此の悲壯な烈火なる銀行よ、
その炎は區から區へと燃え移り、
都の上へあちこちと燒土をまく。

それは大都に幻覺を與へる黃金、
敗殘者をも勝利者をも支配する黃金、

われら昔ながらの西洋の魂を、おそろしくも、
その奥底まで貫き喰ふ黃金である。

昔の信仰

昔の信仰

若しあなたの名が私の堅固な胸の中でうつろに響くとしても、
若し私の魂がからくたもので一ぱいな場所であり、
私の昔の信仰が其處で忘却に委せられてゐるとしても、
主よ、私は此の壊滅を早める爲に何も爲たのではありません。

私はあなたに長い間臆病な優しい心で仕へてゐました、
あなたの沈默に私の喜と私の恐とを叫びながら。
私の肉體には、長い間跡形(あとかた)がついてゐました、
跪いて祈るあの椅子のへりの。

夕暮、感情に堪へずして懺悔しに行つたとき、
私の身はその信仰によつて實に強く高められ、
無限を通して、あなたの處までほとばしらせました、
あの若さに燃えた愛の炎炎たる火を。

私はあんなに單純で貞潔で、あんなに質素で明朗でありました、主よ。
私はあなたの惠に少しはあづかりたいと多くの事を致しました、
さうして、自分の涙で、少しのあとをも消しました、
惡が私の心に殘し得たかも知れなかつたものを。

私は信じてゐました、空も、空氣も、大地も、
深淵の底までもわが神に滿ちてゐる事を。

幾世紀がその熱火の姿を見て進んだ事を。
又その歩みが世紀百年の歩みに鳴りひびいた事を。

あなたは、主よ、時間の上瞬間の上に君臨して居られました。
新らしい黎明毎に、人はあなたの榮光をむかへました。
人は何といはうとも、私は考へようとも信じようとも爲ませんでした、
あなたの現前が、ある日、私から去らうとは。それでも、

なぜあなたは答へて下さらなかつたのです、私が
新らしい日のだしぬけな赤光に生命を探ねた時。
あなたの空は消え去つたやうに見え人間はその爲事の中に
飽く事無き力をあなたに逆つて建てました。

私の聲はそれでもあなたに訴へました、狂ほしく。
けれど私は知りました、あわただしいわれわれの時代では、
あなたの顔がもう此の世の面立でないことを、
さうして私はこの驚愕で罪を犯しました。

私は自分の心を責めさいなみ、どうかして
その苦みと戰とであなたのみ心を動かし得るかと思ひました、
私は自分の心を大きく開きました、けれどあなたはもう立ち歸られず、
あなたは葡萄の上に葡萄の實を黴びさせました。

主よ、私のうちに何が行はれたかを知るのはあなたばかり。
是非無き事とて生活の壓迫が

私の身に拍車をあて又其を勵ましてあなたから遠ざかる起伏多い道に私を追ひました。

私はそれまで反逆の地に嚴存する現實の光明も、
目前にある莊麗も高雅な善良も、
明敏な熱氣ある頑固さも、
又誇も何も知らずに居ました。

私は自分の魂の入口にきらきらする木靴で
飛びはねる者のすべての飛躍の反響するのを聞きました、
私はその跡をつけその炎の疾驅を追ひました、
努力の沸騰する新らしい都の方へ。

熱情が人間から又世界から私に來ました、
私の頭腦の猛烈なリトムが歌ひました。
疑惑、憂悶、忿怒、心を惱ます一切のものが、
遙かに大きい遙かに豐富な作品を作りました。

いささかの未來が私の手に置かれてゐるので、
私の高潔な愛憐の印を其に捺しました。
陰暗は私にとつて別の意味で光明でありました。
私は自分を一人の人間と感ずる事に醉ひました。

さうして今でもまだ私の最も堅固な思想が
愛を汲ひ取る爲には私の心から起ち上ります。
なぜといへば、たとひあなたに見棄てられても、主よ、

私の昔の熱烈な心は些少も衰へて居りませぬゆゑ。

私の眼よ

私の眼よ

さう、一切のものがなほ元氣に滿ち花やいでゐるだらう、
曉の庭の薔薇一輪すらなくならず、
空の天壇に星ひとつ消えも爲ないだらう。
さう、一切のものがすばらしい風の下に若やぐだらう、
まつぴるまの明りの中で、
ああ、おん身等がもう居ない時、私の眼よ、
地の下にはかなくも灰となる時。
それでもおん身等はやさしく又かがやかしかつた。

冬も、夏も、春も、
私の詩をその深い美で裝つてくれたのは、
まづ初め、おん身等のみが、私の淸らかな二つの眼よ、
大地と、森と、風と、空氣と、
この世の數へきれない莊麗とを愛したからの事だ。
おん身等はその頃二つの烈烈たる炬火のやうに見え、
やさしく萬物の魔力に向つてゐた。
おん身等は小枝のデッサンや花の輝を
組み立てる秘密を窺ひ見た。
おん身等は私の魂を美しい祈に導いた、
一切の熱烈で、快活で、純潔でいつも居る者の前での、
さうして花豌豆や立葵が

祭壇のやうに、あの白い壁を莊嚴(しやうごん)した。
又おん身等は外の平原の人人の方へも行つた、
單純なやさしい感動を抱いて、
彼等の睫毛の下に發見するため、
おん身等の中にあふり立つ火と同じ火を。
又おん身等は町の人人の方へも行つた、
その物恐ろしい悲壯な爲事が
未來を孺るため、山や森をひきちぎる處へ。
涙が、昔ながらの悔恨から、おん身等の中に湧き出したが、
頭腦の優秀な又精確な計算に
適度に服從してゐる有りあまる力が
おん身等に新らしい奇蹟を惹き起させたやう。

その奇蹟から、一層大きく一層確かに、生命が湧き上つた。

おん身等はいつも力を合せてゐたし、又尙更力を合せた、
冬の夜がその神秘のかずかずを見せてくれた時、
ぎんな闇黑と黃金との道を通してかは知らず、
大地も感激するあの慈愛に滿ちた多くの炎を指して。

又おん身等は、あの天上で、一番かすかな光を探した、
一番あるかなきかの星を、外(ほか)の世界が
その星に思もかけず深い愛を捧げる爲
熱情の故に連れてゐる星を。

私はおん身等をよく愛した、

いつでも貪婪で、感動してゐて、柔和で、宗教的なのを誇りながら。
私の眼よ、
幾世紀が恐らくおん身等をおぼえて居よう、
藝術の亡びた日でさへ、滿ちみちた愛のゆゑに、
その愛こそ私がしまつて置いたものだ、
おん身等の眼差の中へ。

誇

誇

苦悩と苦痛とに生きるからではない、
刻刻希望を創造するからこそ
この荒荒しい宇宙が信仰に満ちるのだ。

何をかまはう、屋根の下で、
家のなかで、
日の出る時又は日のかたむく時、
十字架のキリストへの祈が
滅ばうとも。

世界のあらゆる場所で累積する努力よ、
おん身こそ深い信を藏すのだ。
冒險する者と勞動する者とは信ずる。
探求する者と發明する者とは信ずる。
曉毎の光は
是非もなく、心の奥に蘇らせるのだ、
その熱情を信ずる念を。

大地がいつもわれらに提出し又われらに隱匿する
あの神秘に襲ひかかるものは、爾來、誇である。
若若しい喜ばしげな誇は身を熱情にひるがへし、
障礙の前で失望に落ちず、

又おのれ自ら毎日の奇蹟をつくり出す。
人間精神が必要とする奇蹟を。

おう私の額、私の眼、私の手の信よ、
探求に醉ふ私の頭腦の信よ、
熱烈な、打ち震ひ、突き進む私の全身の信よ、
いかにおん身は私を一層確かならしめ決然たらしめる事か、
危險と光榮とを連れて
生きる時。

私が自分を
大袈裟な變身をつづけてゐる此の世界の
すばらしい一斷片に過ぎないと感じて以來、

森も、山も、大地も、風も、空氣も、天空も、
私に一層親しくなり
又私自身萬物の莊麗の中のおのれを愛する。

私は途方もなく自我を愛し又自我を讃美する、
地上に於ける途すがら、
人と我とは同じであると爲すのである。
全く彼と同じやうに、私も亦惠まれてゐる、
天才と意志とを。
彼の爲すところは、私にも出來る。

この二つの肺で、私は吸ふ、
世界のあらゆる地點から風が齎す功業を。

聰明に、有益に、快活に、正當に思考する一切のものは又私のもの、
私の魂の奥底から大膽不敵を感じたものは。

そのやうに
私は交通する、
物象や生物の
あらゆる生命と。
一切のものの中に私をまきちらすが、一切のものも亦私の中にはひり込む。
惡か、德か、好いのかそれとも間違か、
私の萬腔の誇はたださりげなく惱を惱み、
又、時に臨んでは、昂然として死ぬ事を修行する、
私の烈しい高らかな力を決して低落させぬため。

機

械

機械

ね、君はあの感動を知るか、
立派な機械の
千百の發條(はね)と千百の横桿(てこ)と
鐵と鋼とのつくる
しなやかな線を
君の指で追ひ又推しやる感動を。
それを撫でるには休みの時間、
夜明の頃からはたらいたので
それがまだ熱してゐる時がよい、

又そのゆるやかな槓桿とその急調な鐵槌とが
不斷につづく巨大な努力から、
まだ人間意志で燃えてゐる時がよい。

なぜといへばそれは意慾するからである、機械は。
愛を以て、それを作つた人達は、
或日、
胸の奥で
動悸うつ心臓の
運動をそれに與へた。
彼等はそれに賦與するに
精確な躍進と後退とを以てして、進ませ
摑ませ又いきなり嚙ませた。

それは秩序を保つて震動し又促迫する
その振舞は人間の振舞よりも確かで、
一努力毎に皆目標に飛ぶこと投槍が的に飛ぶやう。
その複雜な不撓な爲事が
ふと運命の爲事を思はせるほどである。

或るものはさすり又かすり
巧緻であり又陰險である。
高大な横腹が鳴るのもある、
因果なしかし卒直な響を立てて。
こちらのは地下に這ふ。
あちらのは塔の上まで登る。
又は熔爐のだしぬけな火に

外のが、陰暗と塵けむりとの中で、
ぱつと照らされ、
そんな時に見えるのは
途方もなく大きい姿、
光線のさす道すぢに。

工場の物凄い烈しい空氣の中では
機械は無限に累聚した人間である。
頑固な、元氣な、氣を揃へた騒音を立てて、
それは大地を削つて深淵を滿たす。
石炭は裸にされ又たちまち斷片となつて、
大理石や花崗岩が岩床からもぎり取られる。
又大地を拷問にかける大きな起重機の、

あの高い天上に、骨組が、立つ。
國中到る處工事に被はれ
その鐵槌の打擊で大地は疲れる。
地峽は割かれ海はつながる。
不可能をめざす機械は工夫を凝らし、
雷鳴の空もおそれず、
或日、巨大なぶんぶんいふ昆蟲のやうに、
夢中な推進機、張られた翼を備へて、
廣袤の中へ足を入れ飛び廻轉し逃げ去る。

それは天上高く星宿に近づき尚ほのぼる、
どんな探險に向つてか知らず、どんな果まで飛ぶかを知らない。
天空の中吹きつける風の中にそれを見る者は、

昔空間と時間とについて作られた
古い方式的な思想をたちまち變へる。
生命がその全身を鼓を鳴らして通過する。
速力、熱氣、飛躍、力、勇氣、豪膽、
一切が彼等の中に燃えて貪婪となり
どんな新らしい希望に向つて突進する事かと思はれる。
心は、頭腦と同樣、變形せられる。
大地を我が物と爲す者とは、電擊のやうな決然たる行爲を以て、
驀進の思想による火力の網で
大地を抑へこんでしまふ者である。
おう、馴化された騷擾よ、明瞭な言葉よ、簡潔な行動よ、
おう、此の時代の人間精神をだしぬけに照らし
又支配する熱烈な機制體よ。

――誰が一體刻刻にわれらに其を齎し又われらに其を敎へるのか、
おん身を除いては、機械よ。

熱烈な生活

熱烈な生活

私の心、私は此を美しい人間のざわめきで滿たした。
地上に生き又喘いだ一切のもの、
理不盡な豪膽も、みみじひの意欲も、峻嚴な熱情も、
昨日の反逆も明日の秩序も、
私の思想は此を考へるため冷かにはされなかつた。
薄黑い木炭よ、私はおん身から金色の烈火をつくつた。
おん身から迸らせたのは唯炎とその燃え上るひらめきとばかり。
その炎こそ苦悶の生活に莊麗をまじへたのである。
又おん身等、憎惡、善德、惡德、忿怒、慾望よ、

私はおん身等を皆歡び迎へた、おん身等が皆互に相反してゐるままに。
私を身ぶるひさせたあの靈妙な戰慄が
更に長く、更に複雜に、又更に廣大であるやうにと。
私の心は私にとつて努力の故にこそ生きてゐられる。
全人類は苦痛を要する、
その生活をひろげその力をわき立たす爲、
酵母のやうに、沸沸とそれを苦しめるものを。

出發する以上、きつと到着爲なくとも、其が何、
又遠方で山の頂が移り動くのを見ようとも。
誇は常に絶巓めがけて登るにある、
極微の罪にもおのれを恐れながら。
墮ちるものは、たとひ墮ちても、いつか、又もりかへす、

若し彼が亂闘に熱狂して、
その力をたちまち十倍にもするほど、
憎みや愛に奮激したら。

又觸、味、香、聲、色。
眼を開いて曉や夕暮が
地平を渡金し雲を薔薇色にするのを見、
海に近く路をゆき又濱邊で歌ひ、
まるで植物の火炎のやうな
森の上で氣違じみた風の踊るのをきき、
花瓣の波の中で香料を集め、
いくらでも出る新鮮な果物の液を吸ひ、
又は夕暮、その愛の床の上で、人のからだが、

その晴れやかな胸にぱつと輝く時、
手を極甚の愛撫に捧げること。
ね、かかる幸福のほか世には何もない、
世に在る爲に、狂喜して接すべきは。

おう憤然として私が動かす筋肉よ、
おう私の全身を輕快にし、
どんな熱であらうとおん身の循環にまじへ去る血のリトムよ、
又此所には私の頭腦があつて彼も亦振ひ起ち
何か探究し又多分發見しようと努力する、
深遠な宇宙の中にいささかの眞理を。
又私が身をふるはせ、雀躍して聞くのは
地下に何者かの語るやうに語る神秘。

さうして大地が脈うてば、私のまつかな、身をちぢめた心臟は
更によく聞かうとして地上に身を倒す。
しかしもう沈默が一切の音にかはつた、
夕暮が落ち、憂愁が墮ち、夜である、
よく響く地にももう何のけはひも無い。
幸なるは、それでも、むせび泣かぬ者等である、
嚴然たる誇を以てそれでもおしかへす者等である。
あまり容易い古くさい甘たるい「確實」を。
最も眞摯な心は、今日、それに飽きてゐる。
別の信が起つて發見に突きすすむ、
きつぱりした、確かな、無數の、又出來れば、
彼に一切の秘密を明かすほど明瞭なものを得ようとして。
新らしい魂はその據達の力を限るに

もはや天空でなく、宇宙を征服する事を以てした。
精確な計算、唐突な目撃、氣長な探究、
一體どんな讃嘆すべき靈感がその魂につきまとひ、
又どんな飛躍が彼にそれら一切の裏面を傳へるのであるか。

一つの爲事が攀ぢ難いほど私はそれに近い氣がする、
私の勇猛心から又私の正しい誇から。
私の歌は勞苦の時間にひびき渡つた、
不幸が私のからだをその大槌の下に抑へた時。
奔騰する海は私を熱烈の氣で滿たした。
私は嵐と、風と、雪と、
運行する空間と水平線とその行列の
飛ぶ雲とまつかな微光とをほめたたへた。

荒荒しい自然は私の全身によつて戰ひ挑んだ、
その兇猛の法則を私に負はせて。
私をして亦自分の意志を訓練して
自分の主たる可き一個の額(ひたひ)を自ら建てしめるため。

港の突堤で

港の突堤で

夕方海岸地から私がめざしてやつて來るのは
太洋とそのとぎろき。
私は兩手を自分のうつろな胸の上で握り、
心臟のうつのをよくきかうとする。
動悸うち、熱狂し、雀躍(こをどり)する者が私の指の下の此處に居る。
私は彼がふるへ又喜ぶのを感ずる、
氣まぐれと喧囂との中にまぎれこんで、
海の風、沖の風の。

彼の滿溢のいのちは、夜、波と星との
暗い雜踏の中にまじり、
彼等のリトムと彼等のノムブルとの爲に誘拐せられるかのやう、
一きり一きりと、渺茫の方へ。

さうして少しづつ、私の頑固な熱情に同意して來る、
永遠を孕んで
たちまち時間と空間とを滿たさうとする熱情に、
途方もないしかし思ひ極めた希望で。

さうして私は思を馳せる、地上一千年のうちに、
私の眼と同じ眼で、

同じ無數の光明が日毎の空を支配するのを
同じく見るに違ひない一切の人に。

さうして兩手を自分のうつろな胸の上で握り、
心臟のうつのをよくきかうとしながら
やはり海岸地からやつて來るに違ひない一切の人に、
太洋とそのとどろきとをめざして。

其等の者の爲にこそ私は發見したいのだ、此の時、
荒涼の空間と烈風との中で、
最上の智慧につらぬかれた一言を、
又未來の意味ある一言を。

其等の者が、ただその一言の力によつて、どんな炎で
私が自分の全運命を抱き、
又どんなに私の魂が彼等の魂を愛してゐたかを會得するやうな一言を、
遠くはるかな時以來。

今日の人に

今日の人に

世界を思つて昂然たれ、おん身此の時代に生きる者よ、
世界は震動し、雀躍し、皷動する、おん身の心臓のうつままに。
世界はおん身のリトムを受け入れしかもおん身の思想は
いつの世でも斯程人間的に祀られは爲ない。

神神とはもはやおん身のあるが如きものの外、何者でもない。
その無窮はおん身の計畫の風で搖めく。
おん身は神聖な大地におん身の命令をしるす、
今後、ただおん身のみ、大地を作り直さうとする。

下劣な戰はおん身の正しい意志を覆さなかつた、
力闘の人であつて畏怖の人でなからうと欲し、
又おん身の骨にしみ臓腑にしみ渡るまで
あの戰慄に滿ちた衝突と戰爭とを慴まうとする意志を。

おん身の明朗な鋭敏な感覺はいかなる時でも開かれてゐる、
おん身自身の中に全宇宙を入らしめる爲、
又おん身の頭腦の光によつて追求する爲、
久遠の生命の極微な新らしい景觀さへ。

神秘は生命の中にありかくも明徹な天才はおん身の中にある、
されば、今後おん身は冒險投機を棄て、

おん身の未來の廣大さに關與する
多くの法則をあぶなげなしに發見する。

健

康

健康

健康が、
私を去つてから又かへつて來た。
見よ、私の額、私の腕、私の肩、私の胴體は
もう一度身ぶるひする、
君の力をひつさげて
私のからだに君が又飛び込んで來て生活するのを感じてだ。
私はのびのびとして又よろこぶ、
ちよつとした自分の身の動きにも。
私の逞しい我儘な

燃えるやうな歩みは大地に支へられて其の上に消える。
私のこうぜんとした額と私の金茶の髪との下で
私の二つの眼は歡樂にひたり太陽をのむ。
私のリトム打つ歩みに野を横ぎる時、
風は私の爲に友となつて唄ひ連れ立つ。
强壯劑の力强い空氣が私のうつろな胴體を滿たす。
私の神經は改造されたらしく、私の筋肉は幸福だし
又私の快活な口と私の親しい兩手とは
空間を握らうとし光に接吻しようとする。

健康よ、
私は熱狂と冒險とに醉ふ。
君無しにはとても生活を馴らす事が出來まい、

自分の粗暴な意志と自分の頑固な希望とに從つては。
私は冉りくねつたそつぽの道を行くだらう、
そして昏倒してしまふだらう、疲れて、征服されて、日暮前に。
われらの時代が其で燃えてゐる急速な猛烈な火さへ
私のうちに勇氣をも、喜をも點火せずにしまふだらう、
そして宇宙の立派さを見て私は恐れるだらう。
君は私にとつて、健康よ、私をして
自分の災の中にも敏捷で居させ又殆と快活ならしめ、
人の世の努力のため其の戰の中に誘ひこまれる時、
私の透明な頭腦を誇に滿たしめる者だ。
健康よ、私の腕を養ひ、私の手を肥らせよ、
私の二つの肺を清淨無垢な純な息吹で一ぱいにせよ、
そして極端まで私の心が高くある爲、

私の眼に輝き、私の額の下に脈うち、私の血管の中に燃え
そして旗にひらめく風のやうに私の身内をかけめぐれ。

死者

死者

ゆふぐれ時たちこめる靄の下に
おほろの空も色あせて靜かにねむる頃、
私は思を潛めて、しかも徒らに悲しむ事をせず、
死者に滿ちた地の上をゆく。

彼等にまだ聞えるやうにと私は歩みを鳴りひびかせる、
その陰暗な秘密な眠の中で彼等が思を馳せるやうにと、
彼等よりも大きな熱と力とを以て
彼等の作つた世界を作り直した者等の事に。

彼等はその棺の上へ涙と一緒にうろつく
閑な哀愁なぐをくれとは言はない。
彼等は知つてゐる、相次ぐ爲事が行ふ
喜や誇への通告を。

彼等の精神がわれらの中にあるのは、われらを害する爲ではない。
又われらを、逆光線の中に置き、てさぐりさせる爲ではない。
彼等の聲はその聲音を耳にした時のやうにまだやさしい。
けれどわれらである、歌ふのはわれらである。

結局時はわれらのもの。美しい光と
大地と波と騒然と群がつて

物質の中にとどろく力とは
われらのもくろみを待つてゐるのだ。

神神も人人もわれらの心には他界のもの、
權力もその法律もわれらの精神には他界のもの。
新らしい無窮がわれらをわれらたらしめ、
又その力をわれらの信に置く。

されば飛べ、人間の慾望よ、人間の力よ、
格闘なり調和なりを得るところまで。
おん身の愛よ新しかれ又おん身の憎よ新らしかれ、
死者に滿つる地の上で。

問

題

問題

そしておん身、堂堂たる蒼然たる章句よ、
そしておん身、暗黒な問題と陰欝な系論とよ、
そしておん身、行列して進む苦澁の名辭よ、
おん身の綴音の下に整へられてゐる意味は
變る、
おん身は變らないのに。
否、おん身はもう近代の思想を包藏しない、
すつかりおん身は使ひ果された、

今日の言葉よ、
そしてただ時として空虛な偶然な反響が
おん身の千百の騷音が空中に揚げる
塵埃に答へるばかり。

それでも、決して若干の力を出して、
人は沈默を破らうとしなかつた、
更によく告白を聞き
又神聖な地上での自己肯定を聽問する爲、
神の、
絕えず自己を求め常に再興する神の。
おう、思想の見張をしてゐて其が

烈火の中でサラマンドラの出來るやうに生れて來るのを見、
魂の奥底に
その最初の炎でまだ灼けてゐるのを捉へることよ。

ね、若し私の全身の叫のうちに、
若し私の堅固な思ひがけない詩のうちに、
明日、物を考へる人達が
いつか彼等自身を認め得たら。

機

會

機會

君の夢に、君の思に、
君のしなやかな手に、君の強い腕に、
君のからだの行ふ強靱な飛躍毎に、
活潑な機會は集中する。

ね、君はそれを感ずるか、今にも
君の慾望の果までも飛ばうとしてゐるのを。
君は感ずるか、そいつが君を待ち合せ、君を待伏せ、又執拗に、
君の勇氣のため又君の助力のため、

どうしても、又いつでも、又なほも試さうとしてゐるが、
運を。

富と生命とを波にまかせる者達は
餘りきまりきつた一切の道から
機會が外れるといふ事を見のがさない。
彼等はあまり強い綱で運命の檣柱に
それを繫ぐ事を用心する。
彼等は皆知つてゐる、月のやうに、
それが年中光つたりかげつたりしてゐるのを。
又それ故喜と苦とを愛さねばならぬ事を。

君の夢に、君の思に、

君のしなやかな手に、君の強い腕に、
君のからだの行ふ強靱な飛躍毎に、
活潑な機會は集中する。

又君はそれが際どくてあぶないので好きなのだ。
まるで輕い挺か何かのやうに、希望をぶらさげて
躍る綱づたひに往つたり來たり馳けたりするので。
計算と用意周到とが君にとつて
目當に屆く一番確かな道であつてもそれが何。
君は勝利の門口に立つて迷信のなやみ一つをも
抹殺せず斥けない燃えるやうな努力を欲する。
かくて君は飼育する、君らしくもないやうに、
君の古い矛盾した心の中に

まだ昔の信仰に住んでゐる者達を。

機會は飛躍に加へるひと跳のやうなもの。
飛躍の弱つた時たちまち其を立ちなほさせる。
それは嚴格な智慧の外に領分を持つ、
又的確な、綿密な、ゆつくりした整頓のほかに。
それは輕快な力であり、その存在は
頭腦のきちようめんな探究的な爲事に
思ひもよらない强烈な巧妙ないたづらをまじへる。
それは一擊で新らしい奇蹟を指示する。
明るい天運の榮光に招かれた人人は
皆、そのおかげで、生命を燃した、
勳功の炎炎たる赤い火で。

彼等は叫んだ、幸運は彼等の權利であつたと、
あまり强く叫ぶため仕舞には
勝利の廣大な白い翼を
彼等の執拗さでつぶされた拳の下に持つてゐると信ずるやうになつた。
おう、ね、何を彼等はやり遂げないで置かう、又やつてみずに置かう、
世界が自分自身の奇蹟を作らうと努めてゐる
誇と、力と、眩暈とのわれらの時代に。

君のしなやかな手に、君の强い腕に、
君のからだの行ふ强靱な飛躍毎に、
君の夢に、君の思に、
活潑な機會は集中する。

トンネル

トンネル

到る處鐵の工事がいきり立ち又つづく。
山は、廣大な工場のやうに、夜も、聞く、
明るい鐵床（かなしき）の上に重い鐵槌のひびくのを。
路には金色のすばらしく大きな松明が燃えてゐる。
牛飼や山羊番がそれを下から見上げながら、
疲れた獸の群を夕暮時に引いてゆく。
この星宿へまでも屆く段段火が
あの山上の人人の誇に襲ひかかる

何かひどい災厄を夜彼等に夢みさせる。
彼等は此の遊擊的な爲事を內心恐れてゐる。
山腹の素肌に大火(おほひ)をかかげ、
佛蘭西や獨逸から道をくりぬいて、
新らしい國へと彼等の國をつきぬく爲事を。

ランやダニウブやロオン河から來た者には
西部地方(ロクシダン)の山山をつきぬかせ、
ジエノアやピザやアンコナからのには
地中海のぴかぴか見える
南方の山山を千萬の齒で穿たしめる。
組はそれぞれ工事の現場へ導かれる。
一律の嚴肅な命令は、組から組へと、

鶴嘴によつて、岩の中を進む事だ。

狹い岡の上に穿孔器が据えられ、
——銃口(つつぐち)そろへた長い小銃の束とでも言へさう——
鋼鐵の齒で、彈丸よりも遙によく、
岩や待伏せしてゐる邪魔物を攻擊する。

夜が明けて日の暮れるまで
人はその靜かな、しかし執念深い奮激を聞くだらう、
ね、どんなに長い日と年との間、
そのきりきりと咬む事を力めたりゆるめたりする事だらう。

最初にやつた爆發が景氣よく岩を引裂き、

又いきり立つ――日中のリトムうつ電光――
けれど眞紅の砂岩にひびき渡つたその震動も
明日はもう地下の鈍音に過ぎなくなる。

ごつごつなまつ黑な入口がもう荒くつくられた。
深い大きな夜をそれが土工に浴せかける。
陰は荷を脊負つた彼等の脊中をたちまち消す、
光が足の方にまだ遊んでゐるのに。

額と脊骨とをかがめて、圓天井の下へ、
彼等は大きなカンテラを持つてとうとう消え去る。
ね、どんな秘密な曲りくねつた墓の爲に
彼等は闇黑を細工し又彫刻するやうな事をするのだらう。

彼等は程無く變遷する季節を知らなくなる、
大地のまはりを巡回して歩いてゐる者等を。
彼等の眼は眞實の生きた光を忘れる。
晝日中彼等の畠と彼等の家とを暖めてゐるものを。

彼等はめいめい途方もない高になつてゐる數字である。
もう彼等の歸つて來るのを見ない町の人人にとつて
彼等が既に一の思出に過ぎないとしても其が何、
彼等の闇夜の歩みが他界の人間に向つてゆくのだとしたら。

北方で、山を穿つ者等は
規律正しく守つてゐる、その動作と

又彼等の調子を揃へるよくきまつた掛聲とを、
南方の者等こそ早急の爲事をよろこぶ、
びつくりするやうな又陽氣にやつつけるやうな。

たしかに人はまだ知り合はない、
山の兩側では。
トランタンやロマアニュの人人は
ダニウブやエルブやランの人人を笑ふ。
煤煙の沼の中で生活したり腐つたり、
あるものとては風と雨と
腰を被ふ霧の襤褸とばかりなのを。
いかに學者が證明しても何にもならず、
彼等は敵意ある、盲目の、責めさいなまれた土壤の底で

仕合よい邂逅があらうとは決して信ぜぬ。
別別なトンネルをめいめいに堀るのだらう、
爲事も亦それだけ長く陰氣に續くだらう、
闇の中で。

それでも、幾日の後、つづいて尙も幾日、
幾夜、數へきれぬ時間の後、
或るゆふべ、人が夕食に圓く坐つてゐると、
廣大な裂目の中に屈んでゐた或る一人が
かういふ、
彼の耳が
人の足の、鈍い、リトムある音のうつのを聞くと、
壁の岩の中で。

皆がききすます、その姿はつくりつけたやうになり、
その眼は闇黑の一面に向けられる。
けれごもう何も動かぬ、愁然たる山の中で、
沈默が、又も、たちまち元に戻る。

おう、何と拳は重く、何と腕はゆるんだ事ぞ。
この束の間の希望の後で、彼等の課業に又かかる時。
岩とその壁とを相手の搭闘を又始める時。
別の日日、別の夜夜、別の時間が
彼等の倦怠と恐怖と誘惑とに加はる。
その時、或る朝、まつさをになつてうろたへた一人の男が馳け出し
聖母や神の名をよんで祈をあげる。

彼は三度長い雷鳴が
山から出て石から石へはねかへるのを聞いたのだ、
あそこで。

おごろき、のぼせ、足を早めて、
皆は彼を追つてその近くへゆく、
音が又した、誰にもきこえる、
鑛山で、岩から岩へ、
火藥の爆發が起す
間を置いた震動に似てゐる。

組織立つたまとまつた一つの勞役をおもはせる。
たしかに其處には合圖を待ち構へてゐる連中が居るのだ、

胸をとごろかし又止む事無き熱にかられて。
やがてこちらの者達は皆槌を掴んで
木靈がやるやうに一撃一撃と其に答へる、
此ばかりがまだ歌や作業を隔ててゐる
砂岩とバザルト岩とで黑い、この壁が
上から下まで震動して今度はこちらで鳴るやうにと。
疑惑は一瞬の間に死んだ、飛び去つた。
ほんとに初めて、一切が喜であり光明である。
一切が大地の中での酣醉であり信仰である、
夜の底にも居く中での。

陽氣さが、小石のやうに、大勢の上に飛びはねる。
重荷も輕いし鶴嘴も樂。

筋肉は喜んでからだをしやつきりさせ、
力を入れる度に勢よく緊縮する。
人は片岩の巨大な塊を運びながら歌うたふ。
勞働がお祭となり又何物も其に抵抗爲ない。
最後の仕切がもうぐらつく、
二晩すれば、夜明には、壞せるだらう。
鶴嘴は一層猛烈に石の中へうちこまれる。
一人のミラノの男が、割目の孔へ口をあてて、
大きく叫ぶとラン出の土方が其を聞く。
言つた言葉は理解され註釋されるだらう、明日。
皆いつしよに昂奮して誰でも
自分が第一の窓を明ける者となりたがる、
敵意ある、盲目の、責めさいなまれた此の高い壁の上へ。

おう、このだしぬけに激越する努力の突撃、
堤防の根にうちかかる群り立つた波のやうな。
誰一人睡をおほえず、疲を感ぜぬ。
すべての頸はのばされ、凡ての息は短い。
とうとう、夜明前に、ハムブウルの大男が
鐵砧よりも重い一かたまりの石を押しのけると、
だしぬけに山の闇黑から湧き出すのを見た、
もう煙を立てるラムプのそばの、彼の兩側にではなく
正面に、彼の眞正面に、一人の仲間が。

まだ割目もよくは出來ない壁越しに
百の手が、一飛びに、忽ちさし出される。

明いた孔はうごめく腕で一ぱいになる。
誰でも叫び誰でも騷ぎ何もかもわからなくなる。

けれど心は皆調和し動作は皆喜ばしげ。
一度にごつと又大急ぎの作業にかかる。
皆せいせいした、はきはきした、元氣な、兄弟じみた氣がする。
トンネルにずつと通つてゐるぴかぴかしたまつすぐなレエルは
地から地へ渡された熱誠の紐のやう。
さうして今南から又北から、地平線が、
陰暗と、鑪屑と、塵埃とを通して、
山の薄暗いまんなかで再會させる、
同じ光線のいろいろ違つた明るさを。

誇は心と、頭腦と、手とを滿たす。
一切を變化させる希望は人間の希望となり、
人はもう二つの隔てられた海が
彼等の國の岩石を通してつなぎ合はさる事を夢みてゐる。

波止場で

波止場で

思ひ出すか、思ひ出すか、
あの四月の長い夕方が
明るいやうな又暗いやうな、
ぱくぱくたる陰をただよはしたのを、
海の上の、平原から平原へ。
えんじいろのきらきらした沙漠の奥からかと思ふやうに
海の水平線から美しい船が出て來た、
はじめは大きな檣柱しか見えず、
それでもずんずん登つて來て、大きくなつて、勢こみ、

早くも薄桃いろの空にひろげた、
國旗の大きな鷲を。

太洋全體がその重さを支へて、
波から波と海岸まで其を投げつけるやう。
眼が程無く見わけるのは十文字の帆架(ほけた)や
高い龍骨の上に飛び出した船橋。
黃金の汽笛が船首(へさき)に立つてゐた。
帆綱の類は風の唇でひゆうひゆう鳴つた。
帆の中で一人の少年水兵の唄つてゐるのが聞えた。
船は急に速さをゆるめ、
突堤を飛び越えて、港の奥に錨を下(おろ)した、
星の火がちらつく水の一隅に。

船はぐつたり疲れて、夜一夜、其處にねむつた、
空の下で、日毎の歌をききながら。
遠い國からおのが國へと歸つて來た者等に
塔の中でおなじみの鐘がうたふ歌だ。

しかし、翌日(あくるひ)になると、なまぬるいぐろんとした夜明頃に、
荒つぽい荷揚人夫が甲板におしかけた、
深い船腹にしまつてある
世界の斷片、空間の若干を皆
波戸場づたひに、汽車の中へ分散させる爲。
空と水との
光の中にたちまち現れたのは

すばらしい金物。
起重機がその動く萬力で此をはさみ、
かたまりを、そつと、地上に置いた。
石のやうに目のつんだ堅い材木、
まつかな又堇いろの幹が、
そのざらざらな反射に太陽を吸収した。
荷揚場はまるで骨置場の奥のやう、
角や齒の間に、
白い象牙の大きな弓や
まだまあたらしい荆棘のやうな
山猫やシャカルや虎や豹の爪が曲つてゐた。
人は遥か遠くの四辻からかけつけて、

野牛や熊の大きな皮が
上屋の平地にずつとひろげられ、
獅子の皺をよせたしかめた鼻面が
運搬車の横腹に兩側から垂れ下がり
泥濘の中で、だしぬけに樣子ぶるのを見物に來た。
時として、あの上で、船具のごたごたの中で、
のつぽの船の艫の方で、
星空にもまがふ大きな鳥を見せられた事があり、
又前甲板の方で、きらきらするのを見た事もある、
豪奢な冷たい猩猩緋の礦石が。
水夫等は、かなた、熱帶の夜の、嵐の
雷電のありさまを物語り、

空へまで沙漠をまき上げる風の事、
又シイプルからバトウムに到る岬や寄港地の事を物語つた。
花の匂が海の上を渡るといふ頃の。
彼等は、話しながら、亞細亞の強い煙草をふかし、
その手を焦いろのパイプで暖めた。

時として彼等は、夜、ラムプの下で、
山を刻んで出來たお堂から齎した
不思議なまつくろな神樣の像を荷解した。
彼等は杉と白檀とで出來た闇黑の櫃を
地下寺院の奥から盜みさへもした。
彼等の聲は東洋の歌を微吟した、
アレップの娘達が、夕暗の濃くなる頃、

そのゆるやかな足ごりに合せ又その踊にまじへる歌を。

彼等は又物語つた、
天上に聳える亞米利加の都の事、
髪の毛のやうに電線の多いその港の事、
曾て變らぬ煌煌たるその燈臺の事、
海を大きくするかと見えるそのだしぬけな閃光の事を。
それから又
泡も立たない波の上の長い深い靜けさのこと、
吹く風といふ風は
うごかず、
羽一つ曲げる事すらなかつた事を。
彼等は又物語つた、黄金の岬の莊麗な事、

碎ける波に濡れるデヤマンの事、
水もぐりの蛇のやうな動作の事、飛躍の事、
その薄明りの中を海の深みへと
もぐつて行つて
たちまち珊瑚や眞珠を取つて來る事を。

やがて、急に、話を終らうとして、
彼等は、でたらめに、彼等の思出を持ち出して、
勝手に話を漂流させた、
テネリフからカップへ又カップからマルディヴへ。
しかしいつでもつづまるところは
シンガプウルで見たといふ話に落ちた、

ある日の事、
國旗の鷲のやうな絶大な信天翁が
その偉大な翼で彼等の船をすつかりかけらしてしまつたといふ話に。

かくて彼等は、ゆつくりした身振で、
太洋の向うに散らばる生活を描き出した。
又人人は寂しい町の奥から
彼等の方へ寄つて來て
熱心に彼等の眼を見たのである、
全世界を見たといふ眼を。

私の都

私の都

私は自分の魂の中に酷熱の都を建てた。

停車場、市場、鐘樓、穹窿、圓屋根、物見、
屋根の上には硝子があり金(きん)があり火がある。

路行く人よ、君は其處では見られまい、
靜まりかへつた古い爐を圍んで
家の人達が
かたまり合つて居睡り暖まる

あの重い、がたがたの、疲れ切つた大椅子などは。
いきり立つ家家の壁の上には、
古代の版畫も、
羊飼も、マジの王さまも、
牛も、驢馬の子も、
聖母マリアも、
物靜かな物やさしいキリストもあるまい、
私とて今でも其を愛しはするが、もう祈りは爲ない、」
ひざまついて。
路行く人よ、君は其處では見られまい、
さき頃のものの取りちらかされたがらくたきり。
知つてゐる、知つてゐる、

消えやらぬ思出の甘美な魅力は。
けれど私の心の烈しさ潑溂さは
悔恨と過去との中に
無駄をしてゐられない。
息吹と風とが空間を照りかゞやかし、
私の都は宇宙の音響に打ちふるひ、
未來が私の戸を叩く——又私は其に仕へる。

おう、沸え立ち燃えたつた雰圍氣、
それを人が私の市で吸ふ。
大地の力の滿干が
其處では意志に集中する、
相擊つ意志に。

何者も後へに逡巡してゐない。
だしぬけな勝利者が其處では踵の下に踏み碎く、
沒落者を。
一切の夢が更に高い夢に支へられる。
一切が總突擊の賭となる。
熱氣と忿怒と冒險と苦惱とが
新らしい問題の石塊を穿つ。
探究があらゆる頭腦に火を喰はせる、
其處に生きる事の熱情を限りなく成長せしめるため。

路行く人よ、
若し君の心が、一瞬間でも、
ためらひ、尻ごみ、厭み嫌ふなら、

去れ、
喧騷から遠く又爭鬪から遠く。
又若しその同じ心が危險に臨む事を
よしと思ひ、幸福と感ずるなら、
いらだつ早足で入りたまへ、
私の都なるこの猛火の中へ。

運命が其處では君につらく
その人まよはせな迷路はうねうねと曲りくねり、
君の新しい力は
日毎試練にあふだらう。
君は同時に
從順でしかも頑固に、突飛でしかも愼しく、

君の多難な勝利に貪婪でしかも節度を知り、
又君の飛躍を縱にしてしかも君の跳躍を制し、」
君の相剋する百の天與の束を
君のうちに解き又は緊めねばならないだらう。

見よ、
陰暗が靜謐な德の眼をふさいだ。
力や豪膽が世界に課する秩序は
たちまち、民衆に向つて、相貌を變へた。
群集は起ち、語り、叫び、欲する。
無限大の網の中に未來はさわ立つ、
一度に、又こんなに早く、
その結目を多くほどくには及ばなかつたのだ。

義務の小枝と權利の房とが
到る處新らしい葡萄の蔓に栽培される。
路行く人よ、君は
この多端强盛な爲事の爲に
君の頭腦の中で奇蹟の湧き上るのを感じないか。

私の都は君にも又一切の人にも
その激動發作の時にはたらく
喜と英雄主義とを强要する、
たとひ其が彼等にとりわれらにとつてつらい時であらうとも。
生きる事を誇れ、生きる事の恐ろしい時。
君を支へ君を醉はせる矜持の念、

又君の憐憫、君の忿怒、君の善良さをはたらかせよ。
巧妙と剛健と、熱氣と智慧とを
共に交へて君の精神を動かせよ。
君の深い、強い、力ある存在を
有効に、惜むところなく施し與へよ。
たとひ人が光榮無き時に君を否認しようとも、
又死の面前で、心高らかである事より外に、
最後の勝利として、君に何も取つて置かないとしても。
私は自分の魂の中に酷熱の都を建てた。

わが友風景

わが友風景

私は隣人また伴侶として
一つの廣大な力ある風景を有つが
それはまるで顔のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

私は自分の家に居ながらその光と
その空とに生きる、空から來る大風は
ゆらめく樹木をひざまつかせて
その影を地上に投ける。

彼は十一の塔に護られるが
塔は、野の果から、
耕作の涯りない平地の上に
種子蒔く大きな手を見まもる。

一本の樫の木がその荒つぽい威風の下に
この廣袤を抑へてゐる、
それでも光明の千の指が
その垂れた葉の中に遊んでゐる。

響がきこえる、それは小川、
傾斜から傾斜へと

ゆるやかな水の青い手振を低めてゆく、
部落の入江の處まで。

すると又遠く切株の上には、
日向に麥をつみかさねて、
まるで大きな積藁の黄金いろの一群が
本式な會議を開いてゐるやう。

私は隣人また伴侶として
一つの廣大な力ある風景を有つが
それはまるで顔のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

それを色まばらにする寒い青空の下に
冬こそ、私の歩みを迎へて、
私の手觸り荒い粗暴な意志を
その霜で研ぎ上げる。

五月輪伐林のかがやく時、
私の全存在は身ぶるひして光りきらめく。
林の木の葉もわなないた
あの喜の無限大な戰慄に。

八月になつて、收穫が
光の勝利を告げる時、
私は美しい夏をその靜けさのまま

自分の魂の中に漲らしめる。

又若し貪慾な暗い十一月が
森の王冠を皆振り落せば
秋の焚火の炎にこそ
私は自分の希望をあたためる。

かくて豐麗な日光や寛潤な風を
その身にかざす日といふ日、
私は自分の元氣な頭腦のうちに
かかる魅力のさまざまな熱氣を感ずる。

私は隣人また伴侶として

一つの廣大な力ある風景を有つが
それはまるで顔のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

夜でさへ、私は彼をおとづれる、
天上の莊麗にかこまれて
きよらかな靈妙な英雄の
眼のやうに星宿が見える時。

聲高らかに、心燃えて、
私がおん身の名をよべば、荒くれのベルセエよ、
あの廣大な惱める陰が
いまだに其をきいて身をふるはす。

その次にはおん身をよぶ、エルキウルよ、
それからおん身、ポリユックス、それからおん身、カストル。
それからおん身、ゼヌス、おん身の黃金の火は
たそがれの憂愁をつかさどる。

私は神神の傳說に
おん身の碧玉の血の傳說をまじへる、
天の北方に靜かに光る
美しい蒼白のカシオペエよ。

おん身等の榮光のおかげで
私の心は立派に立ち堅固になり、

おん身等の名が私の記憶の中に起す
そのひびきに熱狂し叫喚するほどである。

私は隣人また伴侶として
一つの廣大な力ある風景を有つが
それはまるで顔のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

私は質素な小徑を愛し又自らもそれである。
一つの圍ひ地から外の圍ひ地に行き
又流に沿つて
よく響くほろ穴さして下りてゆく。

風が乾いてつめたくなる時、
一切の物の響がずつと近く聞える時、
どのアンヂエルスが晝に鳴つてゐるかを
私は鐘の音にききわける。

日の一ぱい當つた高い壁の上の
影のデッサンを一一見る、
又枝もたわわに生つてゐる
熟れたブルニョンも私は數へた。

あそこに立つてゐる二本の菩提樹、
今は死んでしまつた手が
雷の落ちないやうにと

門の前にあれを植ゑたのを知つてゐる。

其處等にうろつく獸や草喰ふ獸はどれでも、
皆私に親しく又よく知つてゐる。
その犬の鳴く聲をきけば
路行く人の誰であるかを私は知る。

私は隣人また伴侶として
一つの廣大な力ある風景を有つが
それはまるで顏のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

又私は彼にやさしい深い

いろいろの事を心から物語る、
夜な夜な、光がすつかり消えてしまつた時、
唯彼だけが私のいふ事を聞き得る時。

私は彼に過ぎ去つた日を物語る、
廢頽に重いからだをして
私が彼の若若しさの中に
輕やかなしかも濃厚な空氣を求めに來た日を。

私が自分のうちに
此の世と未來とを愛し
又强くなり支配者であらうとする
昔の慾望の日毎に蘇つて來るのを感じた日を。

岩から岩へ歩きまはつて
私があんなに眞に幸福だつた日を、
眼の底に涙を湛へて
近くの樹樹を抱きかかへた日を。

又霧の下の麝香草や
又風の中のうまごやしが
私の希望や私の思想に比べて
敢て清新瀟洒にも見えなかつた日を。

私は隣人また伴侶として
一つの廣大な力ある風景を有つが

それはまるで顔のやうに變り又輝く、
私の家の敷居の前で。

ね、おん身等をごんなに私は愛したか、
茂つた小山、森の泉、
その外つひに盛り返された力を以て
私の聲のひびき渡つた到るところ。

自分の記憶に心動けば
もはやおん身等の何一つとて見知らぬものはない、
ごんなにしつかりと、
われらの間に一切が交換されてゐるか知れない。

されば私の生涯が成就され
運命の黒い拳の下におさへられて
死の中に消えゆく時、
やさしい友の空よ、私はおん身にねがふ、

どうか私の眼の前に居て
おん身の最も豐かな光を見せてくれ、
私の門出に
この地上が美しくあるやうにと。

木蔦

木蔦

眞紅と黄金とが、樹から樹へ、かけわたすのは、
いきぐほろしい太陽に疲れた葉のしけり、
大木の下に、地をすつて這ひ廣がるのは
秋の谷間の、しつとりした青い木蔦。

木蔦はお寶のやうに其處に積みかさなり、
圍ひ地のやうに森のまんなかに密集する、
寒さにはその消え易い小さな島を
繁り葉の海上はるかにぱらぱらと凍らせて置いて。

心無き行人にとつては、彼はふてくされて
爲事の又毎日のきまつた勞役を拒んでゐる。
處が、ただ地下で、彼はいつでも伸ばしてゐるのだ、
その曲りくねつた根のうねうねした網を。

彼の力はくらやみのもので姿を見せない。
それは頑固なつんぼな意志で出來て居り、
そこにかくれて、或は鈍重な粘土を穿ち、
或は堅い砂を穿ち、或はねばつた泥を穿つ。
土壤の變遷につれて、彼は謀らみ或は激する。
早かつたりのろかつたり、性急だつたり隱忍だつたりする。

彼の道は、うねつてゐるかとすれば又まつすぐである。
彼はまはり道を知つてゐるが、停止を知らない。

明るい春になつて、元氣な何かの幹が
彼のそばでその斜な枝を段段にすれば、
たちまち襲ひかかつて割れた木肌にかみつく、
世にも頑强な千百の齒で。

荒つぽい地べたの中に昔小さくかくれてゐた
彼の爲事が今は隆隆とさかえて來る。
裸のところまで登らうとして彼は樹木を抱きしめ、
その飛躍を測り又程なくその高さを測る。

彼は光明に身をふるはせ風に奮激する。
彼の力は熱烈となり人なつこくなり、
翼の着物のやうに輕い彼の葉は
彼を引き上げ、支へ、前方へ出す。

征服された小枝は皆彼の支へとなり餌食となる。
それでも、決して自分の意志をゆるめぬやうに、
みづから馴らす事を地下で學んだので、
彼は己れを固く持してその喜を制御する。

いつでも彼はそのありあまる精力をちようごよく
纖維に纖維を出して、極微な割目の孔へもねぢ入れる。
さうして夕暮時のゆるいそよ風にしか耳をかさない、

彼にかなでる歌のそよぎで心をそそる風にしか。

すべての彼の爲事が、或日、完成する時、
その繁り葉で一本の木をまるごと、
足から頭まで、廣大に押しつつんで、
もはや植物の炎に外ならぬものとなる時、

彼はなほも欲して、その最も細かな網が
何の支へるものも今はないのに、構はず伸びる。
太虛に向ひ、空間に向ひ、高きにある光明に向つての
どんなすばらしい征服の飛躍を爲すのか誰も知らない。

既に秋が黄金と酒滓いろとを

冬にさきだつ哀愁のよそほひに加へる時、
彼、もぢやもぢやな、みつしりした、まだ青い木蔦は、
鳥の飛ぶのにもその戯れを投げるだらう。

その時、森のさうであるよりも更に自由で朗かで
彼はおのれがその従屬である事を元氣に忘れるだらう。
しかし、束の間でも最高の光を飲む以上、
後に衰へて再び倒れるとも其が何。

東西南北

東西南北

君が、リトムある足ごりで、野のあたりを歩く時、
ひとり喜ぶ爲には斯う言つてみたまへ、
南（スッド）、西（ルエスト）、東（レスト）、北（ノオル）、と。
明るいやはらかな言葉、恐ろしい强い言葉、
美しい詩をかざる言葉。

それをして君に森と、山と、太陽とを呼び來らせ、
それをして君に海と、大きな眞紅の港とが
かなた大地の限界を照り輝かすのを呼び來らせ、

それをして君に茨の藪地と火の沙漠と
赤と青との空の上の純白のミナレの塔と
極地の山の燦爛たる氷とを呼び來らせ給へ。

四月の月、五月の月、
腕をはづませ、足にリトムうたせ、
ひとり喜ぶ爲には、繰返し口にしてみたまへ、
この縱横無盡な音綴を。

夏の日、正午が沸き立つ時、
それは四つの翼が、だしぬけに、
大きな快活な飛揚で空間をうち、
雲の中を翔けるに等しい。

夏の日、それはまた似てゐる。
銀と黄金とのうねりの波に、
見わたす限り、色さまざまな麥の中に、
山や谷を描き出すあの波に。

それはまた年老いた冬の騎士であり、
にはか雨に跨り突風に鞭うつ。
氷雨がそれに着せ霧が其に假面させる。
どんな大きい物凄い槍仕合に向つてか知らぬ、
平原からでも海からでも其が突進する時、
四辻を荒し、
村や町や、
又道の畷に、無窮の

周縁を爲す樹木を破る。

野原のあたりに出かける時、
この力ある名を君の爲に歌ひたまへ。

かくて、輕快な行進と急調な歌とが
東、西、南、北をほめたたへ
まるで其を君の肉身のうちに入らしめるやうだらう、
その熱烈な息吹とその剛膽な飛揚といつしよに。
多分それは、よその世界が住む瀨氣のそとで、
輕く撫でて來た星の事を君に話すだらう、
又息つくやうな豐麗な「ペルセエ」や「ヱヌス」のこと、
又星の深淵の上に立つ「琴」のこと、

又「處女」や「ヱガ」や「獅子」や「熊」の事を話すだらう。
その時君は感ずるだらう、君の血氣の身が
その則を天空の序列と莊麗とのなかに見いだし、
又君の夢がその飛躍とその道程とを
天上の星の黃金の鹵薄に照合し、
又君の力は育ち、君の思想は數限りなく
その鈍重とその陰暗とを少しづつふり落し、
又明朗な廣大さが君の頭腦の中に入り來るのを。

森

森

森は一つの世界でありその生活は私の生活。
思ひ出せる限り以前から、
その存在は私にとつて一の壯大な感激であつた。
まだ極めて幼い頃、森の方へ行つた時、
私はその永久のざわめきに貫かれたやうに感じた。
何だか怪しげに、自分の奥底まで。
私は其を怖くも思ひうれしくも思ひ、
そのもぢやもぢやの樹樹が地上に寄せる神秘を愛した。

私はびくびく進んでいつたが又急に逃げ出した。
私の手に、やつと、持つてゐたのは、
森のへりの藪で取つた
色あせた少しばかりの花。

後日、
怖くはあつたが又出かけた。
太陽が其處では光線を歩かせてゐた、
森の空地のまはりの正面から正面へ。
がさがさした小徑や天鵞絨のやうな地面の上で、
蔭がその母の光明といつしよに遊んでゐた。
大きな靈妙な空間の銀の手が
飛びゆく千百の鳥の翼をそこへ戻させた。

だしぬけに呼びかけた豐かな聲に
森の木靈がその聲で答へた。
又こちらでは窪んだ石の間から溢れ出て
泉が調子よく
輕い響を立てて、そのきらめく水を落としてゐた。

かくて
自分で選んだまる一日、
私の魂は鋭く又卒直に
木の枝の心や歌にしみ入つた。
それでも私の足が
森の
岩だらけな横腹から下りようと思つた時、

一切が又默り返つて再び取り戻すかと見えた、
その疑心とその秘密とを。

一遍で私のその愛念は更に根强いものとなつた。

月から月、日から日と、
その黄金の空の下の大きな樹樹は、
時にあまり强く私を刺戟し私を感激させて、
その光榮を見て私の眼のうるむこともあつた。
一番古い樹樹は名前を持つてゐた。
又時時、夜に、樵夫が、
パイプに火をつけて其話をして聞かせた。
彼はぢれがセザアルだかを話してくれた、

又あれがシャルルマアニュと呼ばれる事、
又あのひとり離れて立つてゐて、
夜ごほし、野原の中で、
大熊星がその上で車を光らす奴の事をも。
彼は一番古いのは千年になるとうけ合つて言つた。
さういふのは星宿とも懇ろに親しく、
氣候温和な月の夕暮なぞ、
きつと、彼等は昔虚空を震駭させた
すばらしい災厄なぞを互に話してゐるといふ事なぞも。
私は彼が夢想し、物語り、やがて默つてしまふのに耳を傾け、
大地の胸に支へられて幹や
額や腕をまつすぐに立ててゐる
あそこのあの多くの樹樹の事しか何も考へなかつた。

程無く冬がやつて來てその萬力で
圍ひ地や畠や岩や流を引き締めた。
氷は月の唇から落ちて來るかと思はれ、
木の葉は、一つづつ、地上にしほれ、
又既に大きな樹樹の坊主になるのを見、
「處女」や「ペルセエ」やマジの星が
降誕祭の夜ものやさしく
細やかに打ちかはした枝越しに輝くのを見た。
私が大きくなつた時、森は一層私を動かした。
新芽の素描に、樹皮の線に、
光榮又は努力を目ざして聳える一番大きい松の木の

年齢なり力なりを認める事を學んだ。
私は赤四手(シヤルム)と楡(オルム)とをそれぞれ見わけるのに、
眼をつぶつて、一本の小枝をさすればよかつた。
楡(オルム)はやごり木を恐れ、赤四手(シヤルム)は恐れた、
巨大な渡綱(わたりづな)を持つ豐かなクレマチスの襲擊を、
それが樹から樹へと飛んで空高く樹樹を窒息させるのを。
抱く事は危險であり思はぬ驚であつた。
時として白い木喰蟲が鞘のやうに、
見かけばかりの菩提樹の陰氣に黑ずんだ幹をがらんどうにした。
空は雷電と黑雲とになり、嵐となつたが、
いかに電光が彼等の額を傷けようと、
どんな災難も幹の誇を棄てさせる事は出來なかつた。
彼等の枝を重ねてゆかうとする誇を、

雲へまでも。

彼等の根もとには苔が金銀の色を爲し、
大戟（ユウフォルブ）や長春花（ベルヴンシュ）やアネモネが咲く。
皆ひどく質素な花だが、
獸や人に好い花だ。
又そのわきに矢車菊（サントオレエ）も咲く、
フユウムテルもロテイエも
又ヱヌスが其金色の頭に挿したといふ
野薔薇も。
それが皆まじめであごけなく見えた。
纖維も、莖も、葉も、雌蕋も、
花瓣も、又葉柄も。

それでも、其處から遠くなく、今を盛と咲いてゐたのは、
惡草と毒草。
敵意あるジユスキアムや意地の惡いグウエが
地面の方にも上の方にも
穽を設けてその襲擊を與へた、
萬物の忠實な又讃嘆す可き熱情に。

けれど、いかにその立場が陰氣であらうと暗からうと、
樹は、もつとよく生きるため育つため、其を考へなかつた。
彼は輕快な風がその百の腕をかけめぐり
數限りない雨がその葉を靡かすのを感じた。
彼は月と太陽との光芒がそこで戯れる
動く格子垣のやうなものを地面に投げた。

鳥の音樂がその目覺を祝した。
山毛欅(ヘエトル)でも落葉松(メレエズ)でも孤獨な樫(シエエヌ)でも、
彼が負はされた使命は地上を滿たす事、
都の骨と筋肉とをつとめる事、
彫大な統一の一斷片に外ならぬものとなる事だ。
枘孔(ほぞあな)なり枘(ほぞ)なり、梁なり柱なり、
星宿に近い、塔の中の、あの高い處の厚板なり、
又はただ、鬪士の額のまはりに、
月桂樹の小枝にまじへて編まれるなり。

おう、幾たびか頭の高い豐かなあの森が
すべての者の爲の贈物又は犧牲に外ならなかつた事ぞ。
誰でもかなた、地平線に、それが

四季の莊麗と哀愁とに與(くみ)し
又世界の秩序と調和を保つのを見た。
冬のさ中でさへ、繁殖をやめず、
芽生は曾てその幹に絶えた事がない。
彼の沈默は彼の力と同等價。
六月がおだやかな太陽をつれ戻せば、
森はその斜の廣大な影を野にのばした。
又それを愛する者は皆そのやうに靜かなのを好いた、
清らかな曉や、なごやかな夕暮。
けれど私のもつと好いたのは、反逆の秋が
その大きな翼の襲擊で、それを心底(しんそこ)動亂させた時である。

その時、

森の中の一切は悲壯となり超人的となつた。
烈風が北から狂奔してくるや否や、
森は物凄いリトムに身をまかせた。
樫、楡、白樺、楤、菩提樹、楓が
たちまちその額からその足まで奮激した、
深刻な、絶大な、一様な動搖に。
嵐のさ中にその動くのを見た者には
それが雲の群がりを掃き散らし、
又その左右の搖れで大地から逃げ去るかと思はれた。
電光は刻刻に彼等を脅かした。
紫の花の奸佞な毒が
風雨の息吹にその呪をまじへた。
惡辣なクレマチスはその跳躍を縱にして

樹から樹へ飛び越えて幹にからみついた。
惡はその荒荒しい激怒の齒で、
奮激した生命の眩く飛躍にかみついた。
けれど如何にその千萬の網が
谷間や森の空地を締めつけようと努めても、
しかも、限りなく大きく、力に滿たせて、あの高いところでは、
風が森全體を歌はせた。
森は一の世界でありその生活は私の生活。

花の方へ

花の方へ

友達の、花の方へ私を行かせてくれ、
その明るさを取り圍むこの靜かな庭の中の。
月はもう高く夏の空にかがやき
池は、ねむりこんだ噴水の傍にまどろむ。

私は宵の息苦しさに歩きつかれた。
私は感じたい、地の上の純粹なもの、
私の上へその無意識な魂の善さを傾けるもの、
そして私の力にその甘美のいくらかを與へるものを。

靜寂な花よ、おん身の色のひびきは
夜と晝との轉變する莊麗と言ひかはす、
いかに年老いても、私の心はまだ愛のなかに
幼年の日を灼いたあの無邪氣な熱を持つてゐる。

彼は、ただ素直に、彼の方へ來る者におのれを捧げる、
途をまがりまがり無邪氣な歌をうたひながら。
彼はかけ引も無く疑もないのを喜ぶので
人が彼を裏切るか僞るかを知らうとしない。

よろこんで、彼はその馬鹿さの中にひたりこむ。
明日後悔せねばならなくとも其が何、

古い地上では誰にもわからぬ
あの清純な慾望を縱にした事を。

彼は少くとも昔のやうに人人の前で
單純に、熱烈に、無邪氣に、やさしく身を感じよう。
おん身の肉身とおん身の芳香とを吸ふ時である、
おう花よ、彼がその一切の信を取戻すのは。

いつでもおん身は彼のよい相談相手であつた。
何か知らぬ確かな平等なものがおん身の中に君臨する。
おん身の傍に茨や柊を生やさば生やせ、
何ものもおん身の釣合よき熱情を亂しは爲ない。

並木の第一樹

並木の第一樹

並木の第一の樹はどうした。
――彼は往つてしまつた、ね、どこへ、
あのゆらめく幹とあの猛然たる葉の繁(しゲ)と
その葉に加へられた空の憤怒と皆一緒に。

ほかの樹樹は。――無窮の方へと
二列に、彼を追つた。
彼等は息も切らず、かなたへゆく、
彼のあとを追つて、平原から平原へと。

かなた、彼等のゆくところは
雄大な單調な、彼獨自の歩が導くところ、
秋の暴烈と恐怖とを冒して。

第一の樹は苦惱の故に偉大である。
長い間、その枝の中で
冬は
美しい夏にその邪惡な復讐を爲たのである。
彼に向つてのみ、北風は
まづ
その憤怒とその嵐とをむけた。
又時として、夕方、強く吹き撓められ、
敗れてさんざんに揉み荒された樹は

地に身を倒し死に衝きあたるかと見えた。
嵐はあたり一面に滿ち空間は蒼ざめ果てた。
折れ曲つた樹は叫んだが、それでも又立ち直つた、
苦悶と恐怖との時が過ぎ去つた後、
彼の枝はねぢれ彼の額は痙攣しても。
その堅固な活動する大きな力のおかげで、
彼はおのれの率ゐる凡ての者を安心させた。
彼は彼等にとつて手本でもあり又同時に光榮でもあつた。
風の小やみの時、彼等は聽いた、彼の聲が
その葉のざわめきをとほして話しかけるのを。
彼等は薄ぼけた地平線に雷電に滿ちて徘徊する
雲を目のあたり見て其恐怖を彼に告げた。
一人は戰はずに逃げようとし一人は抵抗しようとした。

皆意見が違つた、いくら一致したいと思つても。
されば彼は自ら災厄を背負はねばならなくなつた、
銘銘違つた意志を抱くこの千百の樹樹を、
かなた、どんな旅程へか知らず、ひとり導いてゆくのである。

彼等をさう導いたのも、彼が處する道を知つてゐたからである。
彼の決意は固いが、彼の振舞は身がるかつた。
彼等の元氣をよくする爲、二人づつにならべ、
はるかに風の咆えるのを聞くや否や、
聊かもためらはず、自ら途上に立つた。
彼等は彼に從つた、議論と疑惑とを棄て、
危險の時首長のあるのを見て喜びながら。

彼等はその時彼の激した振舞や、
喧囂を貫く彼の獨裁的な叫を崇拜した。
美しい夕又は幽玄な夜夜、
よく彼は空へ頭をつき上げた、悲壯に。
皆彼を讃嘆し皆自問した、どうして、
陰暗が彼の肌を抱くにつれて、
誇が彼に力を吹き入れるのを更によく感ずるのかと。

けれど彼の熱氣で祝祭に變じさせた
その戰に彼が率ゐてゐた樹樹は、
彼といつしよにゐる者ながら、知らなかつた、
どんなしるしがその時彼の頭を祝聖したかを。

誰一人黄金の火が其上に置かれたのを見なかつた、
――朦朧とした冠と炎とが――
そして彼が支配者であり王者であるとしたら、それは彼が
信頼に心を奪はれるが故にさうであるに過ぎなかつたといふ事を。

散歩

散歩

私は花と小川と樹樹との間に生きる。

都か、それはあちらに居る、
幾百萬の脚を持ち、
黄金とバザルト石と大理石との八衢(やちまた)を持つて。
都は花と小川と樹樹とから遠い。

ほんの少しばかりの太陽が私をそこへ誘ひ出し又はおびき出しても、
私はたちまち出かけて、

まるで王様の處へでも行くやうに、
平野をかぎるいや果(はて)の畠の隅に見える
三本の菩提樹の處へ行く。
私は時時
その枝が私の唯一の屋根であればいいと思ふ、
又薄暗い葉が、幹をめぐつて、影を移す
あの大きな蔭だまりが
私の輕やかな動く家であればいいと思ふ。
私は其處に、雨と光と一緒に、住まう、
美しい季節の數々の日を通して、
廣大無邊な地平線の中に我を忘れ、
おのれの心がそんなに大地に近いのを感じてよろこびながら。
樹よ、さうすれば、お前は私に話すだらう、

お前の生きいきした小枝の上に踊り走りふざける風の身輕さを。
お前は忍耐と力とが何であるかを私に話すだらう、
あの仰山な神鳴と素早い稲妻とに對する
お前の樹皮の鎧の下にお前を立たせてゐるものを。
又お前の靜かな樹液は健康を傳授してくれるだらう、
私の深い血管の網をくぐつて
血がその波を寄せ返してゐるこの肉體に。

樹よ、お前からさう遠くなく、
一つの曲りくねつた小川が小石の上を流れてゐて、
岸邊の岩が大空の方につき出てゐる。
いやが上にも高く、その赤いかたまりは小楯のやう。
金剛石のその流の中には、

日光の反射するところにさへ、
粘るやうな天鵞絨のやうな大きな魚が
往つたり、來たり、身を寄せたりしてゐるのが見える。
一匹の昆蟲が菫いろの蔭の中に光つてゐると、
たちまち、透き通つた水から外へ、
鯉が飛び上り、
空中にはげしく身を曲げて、
奇麗な三日月をつくる。

やがて私は自分の手を波につけてじやぶじやぶやり、
又眞珠をちりばめた指を引き上げると
まるで清らかな寶石をたくさん中につかんでゐるかのやう、
それがすべり落ちてきらきらしてしまひに消える。

けれどその奇麗な神神しい清淨さは
腕を傳はつて登り
やがてしづかに
私のからだの中心にまでしみこみ、
私の額に住み又私の眼の中に忍び入る。
おう、わが魂よ、彼があんなにやさしくて敬虔なのも道理である、
お前から光明の方におもむくあの眼差が、
この飛躍と喜と祈との時間に。

やがて風が出て花びらに摘み取るのは
うす色の純潔なふるへわななく露の
しづく。
雄蕋と雌蕋とが

空中にあまり鋭い匂をまきちらすので
私の思は、たちまち、花に向つてゆく。
花たちはあそこにゐて
もう聽いてゐる、
その明るさに私の歩みの近づくのを。
花たちはあそこにゐる、
川から來る路のほとり一ぱいに、
ロオズ　オドンテイトや黄いろのエペルヰエルや、
辛いタネエジイや甘いオリガン。
長い間私は其を眺めやがて靜かにそれに觸れる。
私は彼等に自分の眼の秘めてゐる愛を與へ、
又自分の唇のいきいきした赤い熱情を寄せる。
彼等の前に居る時こそありがたい、

自分がいつもよりも清らかに、いつもよりも純潔に、いつもよりも正しいのに氣がつく。
又彼等の魂がほんの少し私の中にはひつて來て以來、
私は地上の自分の役目を以前よりもよく果す。
私は強くはつきり考へる、みんな私にとつては友達だ、
しかも斯程偏に熱心な又斯程うれしくも爲になる。
彼等は蔭にも日向にも同じもてなしをし、
文句も無しに北風の敵に耐へ忍ぶ。
彼等は廣大無邊な又ちらばらな空間に住んでゐる、
些細な一隅に少しばかりの肥えた土を求めながら、
しかし一切の現實な眞實なものを受け入れながら、
そして彼等を無用だと宣言する人達を不憫に思ひながら。

かくて、
既に凍えたこの大きな樹樹の傍で
私のからだを武裝した以上は、
都が、遠くから、霧の中で私に現れてもいい、
又その大きな聲で、私を呼んでもいい、
私は其處でやさしくてしかも同時に強い氣がするだらう、
私の歩みは其處で大理石の路の上に鳴るだらう、
すばやく、リトムをうち、潑溂に、快活に。
又其處で私を見る人達は私の眼の中に讀み得るだらう、
花と小川と樹樹との有りあまる明るさを。

或る夕暮の路ゆく人に

或る夕暮の路ゆく人に

ね、ごの歩みが、
この曠野の大道を
往き來する千の歩みの、
ね、ごの歩みが
靜かに、或る夕暮、私の低い戸の前に
止まるだらう。
ささやかなのは、私の戸、
あはれなのは、私の家。
けれごそんな事はごうでもよい。

地平線一ぱいが内の中に
一日中いかな時でも、窓を開けば入つて來るのを私は見る。
さうして季節季節の光と陰と風とは
私の身の喜と力と飛躍とである。

若し羅馬で聖徒と殉教者とを死なしめた
あの神の惱をもう私が自分の中に持たないとしても、
所緣と祈誓とを變へたに過ぎない私のこころは
うちに人間の喜と惱とをいだいてゐる。

ね、この歩みが、
この曠野の大道を
往き來する千の歩みの、

ね、この歩みが、
靜かに、或る夕暮、私の低い戸の前に
止まるだらう。

私はその手を握るだらう、私の兩手をさし出して。
歩みと共に、夕暮の奥から
やつて來るその人に。
さうして天上に高くかかる
あの千百の炎と又陰とを前にして、
われらは長く默つてゐよう、
優しい沈默のつづくにまかせて、
われらが二つの心臟の搏つ
二重のカダンスと感動とを鎭めよう。

ごこから來てもかまはない、
私の中に君臨すると同じ熱情を
彼が愛し信じ
高め又鼓舞する者である以上。

その時、ごんなに二人とも驚くだらう、
たちまち、互に相燃えて同胞のやうな愛を感ずる事に。
又ごんなにわれら二人の心が高らかさを感じよう、
まだ相識りも爲ないのにやさしくてほがらかで互に信じ切つてゐる事に。

人はその生活を語り合ふに狂暴の慾望を以てし、
その魂の奥底まで誠實であり眞實であり、
過と宥と譴責と皆ひとつの高潮に融かしめ、

又膝を折つて共に泣かうとするだらう。

おう、美しいだしぬけな喜。おう稀有な猛烈な醉。
おう、力と、豪膽と、感動との分有。
おう、おのれの底まで降つては
又無限のやさしさに滿ちて登り來る眼ざしよ、
おん身は、おのれ等自身に突如として奮激するこのわれらの
二個の人間の感激を能く結ばせ、
その悲壯な愛とその充全な幸福とを
至上の平面にまで引き上げる。

又今は
われら窓にあり

天空を前にし、
既に相識る事を學び
又互に愛すれば、
われらは、ね、ごんなに心を引かれて、
沈默を通してわれらに語るこの宇宙を見る事か。

われらは又その星とその森とその山と、
又野を往き來して
薔薇や柊を一撫でにするその風とを以て、
われらに告げる宇宙の告白をきく。

われらは草を通して泉のおしやべりをきき、
又花をめぐつてしなやかな小枝の歌ふのを聞く。

われらは彼等の聖歌をさとり又彼等の言葉を捉へ、
さうしてわれらの愛は新らしい熱氣で一ぱいになる。

かくて一切がわれらの中に變化し、
實にゆたかな人間的な火でわれらの共に燒かれ又生きるのを感ずる。
さうして未來が待ち構へてはわなないてゐるわれら自身のうちに
われらは明日(みやうにち)の人の心を下描きする。

ね、ごの歩みが、
この曠野の大道を
往き來する千の歩みの、
ね、ごの歩みが
靜かに、或る夕暮、私の低い戸の前に

止まるだらう。

題跋詩

私の集

私の頭腦と私の眼とが死んでしまふ日、
私の榮光は
なほ長く記憶の中にのこるだらう。
そして私の明るい強い詩は
なほ長く先驅しリトムうつだらう、
誰かの響ある勝手な歩みに。
新らしい人人が地上を行進する時。

私はそのからだの中、手の中、聲の中にゐるだらう、

努力のため開拓の爲にしか生きぬやうに、
如何に儚くとも、その熱烈な生存を、
人間ながら、頑固に希望し又鍛練する者の。

私の叫は最も長い警告の叫をも支配するだらう。
又私の狂暴な大膽な詩節は
永遠の間に火を投げて
すべての人にとつて又銃のやうに輝くだらう。

君達はその血管の中に私の血の流れるのを感ずるだらう、
都會の誇となり光明となり、
力ある未來の高大な建築家となる
君達清朗な學者よ。君達熱狂の探求者よ。

私の心は君の心の中に元氣にひろがりゆくだらう、
靜寂な精神がその光滴る野邊を愛する人よ、
殘忍な戰爭や血まみれな太陽や
割られた鐘や灰燼の部落なぞから遠い野邊を。

私の韻語は君達の求めてゐる言葉を語るだらう、
君達の二重の光明が
その眼に瀰漫し、又君達の二つの心に寄り合ふ愛の思で
その眼瞼をうるほすのを知る愛人等よ。

又君達、鳴りひびく港や沸き返る造船工場の
迷路の中にまぎれこむ職工等よ、

遠い世紀のため私は君達を聳立させた、
大都を鍛冶する君達の薄黒い腕を持たせて。

君達は皆私にとつて時の前には從屬である。
時のみが審判者であり又私の尨大な爲事を支持するだらう。
私は征服者の拳で一切の君達の相反對比をよぢり合せた、
私の激越した詩の中でそのため嵐がとごろくやうにと。

天上の炎

大正十四年三月二十日印刷　1—800
大正十四年三月廿五日發行　〔定價二圓〕

飜譯者　高村光太郎

發行兼印刷者　東京府北豐島郡長崎村一六二　長島豐太郎

印刷所　東京府北豐島郡長崎村一六二　曠野社印刷所

發行所　東京府北豐島郡長崎村一六二　新しき村出版部　振替東京五一五四七　電話小石川一〇九九